
意外な人の恋愛

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意外な人の恋愛

【NZコード】

N5271Z

【作者名】

餓鬼

【あらすじ】

俺の名は姫条悠里^{きじょう ゆうり}は親の勝手な都合により婚約者を決められたその相手は白皇学院に通っているらしい。そんな物、俺には関係がないと思っていたが……あの日、俺が見たことによつて俺は彼女に惹かれていた。

駄文ですがよろしくお願いします

プロローグ（前書き）

勢いでやってしまった！
てか、新刊についていた映画を見て思
ついた。

プロローグ

ある日俺は親からいきなり言われた。

「実はね、悠里君には婚約者が居ます」

「へつ！」

学校から帰つてきたらそんな事を言われた。

「冗談はその妖怪じみた顔だけにしてくれよ」

「冗談で言つたが俺は右頬を殴られた。

「本当よー。でもねその子は日本に居るのよ」

俺は頬を擦りながら聞いた。

「それで、日本に行こうと」

「正解」

母さんの顔は満点の笑顔だった。

「待て！ 学校はどうするんだよ。俺はまだ、卒業していないんだぞ
言い忘れいたが俺は16歳で高校一年生だ！ だけどいろいろあ
つて大学に行っています。

「それにな、日本の高校に行くより。このまま大学を出てから行け
ばいいじゃないか」

「それはダメよ。それに、大学の方には今日までと連絡入れといた
から」

俺は固まつた。

「母さんは父さんを泣かしたいのか？」

「大丈夫　　さつくんなら泣いて喜んでくれるよ

それは喜んでない！ 唯のお金が勿体なくて泣くんだよ。

さつくんとは俺の父、姫条佐治^{きじょうさじ}大企業の社長だが母さんのお金
の使い方には反発が出来にチキンだ。この家庭の財布を握つてるのは
母、姫条由紀^{きじょうゆき}どこか常識が抜けている人だ。

「それで、日本に行くのは何時なんだい？」

俺は部屋の中を見ながら、呆れつづ言つた。

「今からよ」「

そうだと思ったよ！ 部屋の家具が何一つ無いなんて可笑しいよね。

「不幸だあ！」

俺は某魔術師に出てくる男の様に叫んだ。

この日から俺の日常が変わってしまった。そして、あの日を境に俺の中の何かが変わって行つた……そう、春風千桜との出会いによつて。

同時刻日本

「実は千桜ちゃんに婚約者がいます」

夕飯の時間に母から告げられた言葉に固まつてしまつた私。

「何かの冗談ですか」

私は何かの冗談だと悪い聞き流そうしたが

「本当よ、その人達とは学生の時に約束したのよ「子供が生まれたらその二人を結婚させないと」そしたらOKくれたのよ」

なんで簡単に承諾したんだ。

「それでね。近々白皇に通うらしいの」

「それで、私にどうしろと」

「頼んだわね。千桜ちゃん」

この日、私の日常が崩壊した。でも、あの日の出来後でこうなるとは思はなかつた……そう、姫条悠里との出会いによつて。私（俺）が恋を知るなんて思いもしなかつた。

プロローグ（後書き）

後悔はしない、完結まで持っていく！

キャラ設定

名前：姫条 悠里

きじょう ゆうり

性別：男

容姿：上の中

好きな物：小説^{ラノベ}、ゲーム、勉強

嫌いな物：自分を嫌な目で見る人、運動

髪の毛は黒、背は170後半だ。

学力が高いため16歳で大学まで行くが母の勝手な理由により辞める。そして日本に渡る。アメリカではその頭脳のせいで友達がない一人で勉強をしている寂しい人間だ。それでも、日本にはたくさんの人気がいる。それは三千院家、愛沢家、鷺ノ富家、橋家といった人たちと仲がいいが兄的存在として見られている。

恋愛に関しては知識がゼロなので同世代の女子と話するとテンパってしまう。

頭が良いのは天然な母を見てこうなりたくないと思い勉強を始めると小学生のころには高校並の頭脳になつており、誰もが認める天才だったが本人は天才と言わるのが嫌いだった。自分を見てくる同世代の目は自分を寄せ付けなかつた、自分を差別していた。その為、日本ではなく国外で過ごしていたがどこに居ても同じような扱いを受けていた。

出合いは突然

日本について部屋を整理し終わり棚を見てみると何冊かの本が無くなつてゐる事が分かりどうなつてゐるのかはどりでもいいが新作の小説を買うために近くの本屋を探すことにした。

「本屋つてどこにあるんだよ」

俺は日本にはほとんど居なかつたため地理などが分からず道に迷つていた。

「こうなつたらスマホで検索を」とポケットを探してみたら。

「……ない」

家に忘れてきてしまつた。

「はあ、どうするか」

財布はあるのに携帯を忘れるなんてどうしたんだろうな。

「家に帰つてから行くか」

そう思つて家に向かつて走り出した俺だったが、曲がり角の所で誰かとぶつかつた。

「いて」

「うつ」

俺はそのまま倒れこんでしまつた。

「すみません」

頭を搔きながらぶつかつた人を見てみると俺と同じ年の女だった。

「だ、大丈夫ですか」

俺は慌てて立ち上がり押し倒した女性に手を伸ばした。

「大丈夫です」

俺は一安心したが押し倒してしまつた罪悪感は残つてゐる。

「どこか、怪我していませんか。頭とかぶつけてませんか？」

俺が心配しながら言つたら女性は驚いた表情をしてゐた。

「どこも怪我してませんから大丈夫です」

「良かつた。怪我していたらと心配してしまって」

「私はこれで」

立ち上がった女性は立ち去ろうとしていた。

「すみませんが近くに本屋さんは有りますか。最近こちいらに来たらばつかりなので教えてくれませんか」

俺はこのまま目的を達成する為に聞いた。

「近くの本屋でいいんですか」

「えつと、出来ればラノベがたくさん置いてる所はあるかな?」
見た目は年上だから普通に話せるが……

「ラノベを読んでるのか」

何だか、女性の目が輝いてる。

「そうだね。自分は話す人がいないから本をよく読むんだ」

「だったら、来てくれ」

何だか俺はこの人の何かを焚き付けてしまった訳だ。

「そうだ、見た目は年上だけど。年齢教えてくれるかな」
女性に聞くのは最低の男だがこれが同じ年ならアウト。

「私は16だが」

「はい、ダウトオ!」

「お、同じ年」

ヤバい、同じ年と分かつた瞬間に緊張してきた。

「君こそ年上じゃないのか」

「いや、お、同じ年だけど」

テンパってきた。

「どうしたんだ?」

「い、いや、実は俺は同じ年とあまり話さないからテンパるんだよ

「よくある、ヘタレキャラだな」

「辞めてくれない! 俺はヘタレじゃないから……あれ!」

普通に話せている。

「普通に話せるじゃないか」

「良かつた」

その間に本屋に着いたと思つたらアニメイトだった。

「ここが、アニメイトだったのか」

へえーここが日本のアニメ専門店なのか。

「始めてくるのか」

「ああ、今までアメリカに居たからここは楽しみだ」

多分、俺の目は輝いていると思つ。

「嬉しそうだな」

「アメリカと違つて日本の本が読めるのはとっても嬉しいんだよ。日本語の本は中々売つてないからね」

ヤバい、俺が知つてない本がたくさんあるよ。さすが日本！ ナギが言つていたほどに良い国だな。

「買った、買った」

「凄い量だな」

俺は紙袋二つ分くらいの本を購入した。

「そんなに本が好きなんだな」

「それぐらいに友達がいないんだよ」

俺の心をえぐる言葉を言わないでほしい。

「そうだ、名前教えてくれないか。俺は姫条悠里」

「私は春風千桜です」

趣味に合う人はいいな。

「教えてくれてありがとう」

俺は袋を持って走つて帰つた。

その夜

「どうしたの悠里君、嬉しそうにして」

「いや、何もないよ」

スープを飲んでいると母が何かを言つた

「そうだ、悠里君の婚約者の名前は春風千桜ちゃんよ」

俺は盛大にスープを吹いて、ビックリしそうで床に頭を打ち付け

気絶した。

気絶して夜の記憶が無い悠里です。今日は白皇に登校する日です

！高校は行つていないので楽しみじゃないです。

「はあ、二年になつてからでよかつたんじやないのだろうか」

今は一月だ。だから実質後、一ヶ月で進級なんだよな。

「勉強の方は大体ついて行けるつていうか簡単なんだよな」

教科書などは昨日届いていたので読んだが簡単だった。

「帰りたい」

そう言つてる間にも職員室に到着していた。

「失礼します。転入生の姫条悠里ですけど」

職員室に入ると一人の教師が近づいてきた。

「君がそうか、俺は君の担任だからよろしく

おお！顔に担任つて書かれているぞこにつけモブなのか。

「よろしくお願ひします」

俺はぺこりとお辞儀をした。

「教室に案内するか迷うからついて来てくれ」

「分かりました」

担任の後ろを歩いていくが本当にこの学園は無駄に広くないか？

「ここが君の教室だ」

普通の扉だな

「ここで待つといってくれるか。呼んだら入つて来てくれ

「はい」

待つ間どうしようかな、本でも読んでいよつか？ 集中しすぎで
ぼつとしてそうだからやめておこう。

「入つて来てくれ」

その合図とともに扉を開き中に入った。

私は昨日何をやつっていたんだ。初めて会った人にいろいろ話してしまった！学校と外での話し方が変わってしまうのはいけないな。

「今日から転入生が来るから仲良くしろよ」

ん！こんな時期に転入生かおかしくないか？もしかして、昨日のアイツか？違うだろう。

「そいつは何と……男だ！喜べ女子共！落ちこめ男子共！しかもイケメンだぞ」

男がならあるかもしないな、でも……イケメンではあった。

「入つて来てくれ」

先生が合図して入つていたのは姫条だつた。

「失礼します」

「第一印象は大事だよな。

「自己紹介してくれ。姫条」

何だろう、女子の目が輝いているんだけど。

「初めまして、姫条悠里です。親の勝手な判断で転入しました、短い間ですけどよろしく」

最後にニーツコリと微笑んだら、ほとんどの女子が顔を赤くしていったが、男子は睨んできた。怖いよこのクラス。

「姫条の席は……何処だ？」

先生の発言で全員がこけた。

「お前らどうした？姫条の席は春風の横で良いか」

いや、隣に座つてる人がいるんですけど！

「おい、そこのお前の席は後で用意するから空き椅子な」

この教師、頭大丈夫かあ！

「先生、それはひどくないですか」

「酷くない！これは先生からの愛のムチだ」

そんな愛は誰もいらないから！そして、普通に席を譲るなよ。ん！春風つてもしかして……席の横を見ると昨日あつた彼女が居

た。俺は席の隣に来て挨拶をした。

「よろしく」

それにもしても、眼鏡を採つたらもっと可愛いやうな。

「ああ、よろしく」

ん！ 昨日と全く態度が違うな、学校ではキャラを作っているのか？ 少し残念だ。

「よし、授業をしたいが皆は姫条の事を知りたいと思つから質問時間にする」

おい！ 教師がそんな事を言つていいのかよ！ 誰か反論をしないのか！

「はい！ ここに来る前はどこに居たの」

答えないといけないんだよな。

「アメリカの大学に居ました」

「大学？」

全員の頭に？ マークがついている。

「次は、何で大学に居たの」

「飛び級ですけど？」

普通に答えて良かつたのか？ てかいやな目で見られるのが普通なんだよな

「すごい」

「すげー」

ん！ 予想してたより普通のリアクションだ。

「次はなんで日本に来たの」

「あーそれについてはあまり言いたくないけど、日本に婚約者が居るらしいんだ」

「らしい？」

「まあ、親が勝手に決めたことだからね。俺的には嫌なんだよね。

本人の意思に関係なく婚約なんて相手に失礼だと思うんだよ、それが俺の意見なんだよ」

「とつても優しいね」

これは俺が反対しているだけで俺が嫌がっているだけだ。でも、
彼女なら良いかもしね。そんな感じで放課後になつた。

「疲れたー」

俺は机に倒れていた。

「大丈夫か」

声をかけてきたのは春風だつた。

「ああ、ありがとう。」

「いや、帰らないのか」

「話があつたんだよ。えつと、知つてるか」

「何が?」

「まだ、聞いてないのか。えつと、俺が君の婚約者です」

「えつ／＼」

「え! 何で赤くなるの

「赤くなつてるけど大丈夫か」

俺は立ち上がりつづけに近づこうとしたら

「だ、大丈夫だ。びっくりして焦つただけだ」

「いやだよな。勝手に決められるのは

「私もそれは思つた」

「まあ、普通に仲良くしようぜ」

これでいいのか

「あ、ああ、そうだな」

なんだか焦つてないか。

「俺の事は姫条じゃなくて、悠里つて呼んでくれ」

「私の事も千桜でいい」

「これは仲良くなつたで良いんだよな。

「よろしく」

俺は千春に手を伸ばして握手を求めた、これが同年代と初めてする握手だ。

「こちらこそ」

千春は俺の手を握つてくれたこの手を

「 / / / / /

そんな事を考えたら熱くなってきた。

「じゃ、じゃこれで帰るよ」

握っていた手を離して走って家に帰った。

休日

手を握った翌日は休日で家に居るのは暇だった為とある豪邸に来ている。

「よお、ナギ元気だつたか」

客間で紅茶を飲んでいたら家の主が登場した。

「あれ、何で悠里がいる。いつアメリカに行つたのだ?」「寝ぼけてるのかこいつ

「お嬢様、ここは日本ですよ」

すかさず、青髪の執事がツツ「なんだ。あれ、アイツは何所に行つたんだ?」

「そうだつたなハヤテ」

やつと田が覚めたんだな。

「それで、悠里は何時日本に帰つてきたんだ」

「三日前だけど。それで、その執事は誰だ」

執事が変わつたなんて聞いてなかつたからな。

「ああ、こいつは綾崎ハヤテだ。とある事情で執事をやつてている」

「なんで、クライスさんが紹介してるんですか」

「いやあ、ここで出ないと一生出番が無くなつた気がしまして」

お前は一生でなくていいから。

「綾崎か、俺は姫条悠里だ。悠里と呼んでくれ」

「分かりました。自分の事もハヤテと呼んでください」

「ああ、ここに屋敷には慣れたのか」

聞いてみたら凄い顔をされた。

「慣れの慣れましたが……」

わかるが、俺もここに来た時に出会つたトラを解剖したかつたからな。

「それで、日本に何しに来たのだ」

「ナギ、お前は年上を敬えよ。日本には婚約者に会つに来た」

「へえー 悠里にもそんな話が来てたんだ」「会つたが結構良かつたよ」

「ヘタレのお前が良くなつた」

「俺つてヘタレのレッテル貼られていたのか。

「ナギ、そういうことは思つていても言つてはいけませんよ」「二人ともそれ酷いですよ」

そう言わながら紅茶を飲んでいる俺

「それにしましてもいきなりではありませんか」

マリアさんが紅茶を注ぎながら言つた。

「しようがないよ。うちの親ですから」

「せやなコッキーの暴走は止めれんからな」

咲夜がいつの間にかいた。

「お前は何時から居たんだ」「お前は何でいるのだ」

「今さつきに決まつてるやん」

「お前は何でいるのだ」

ナギは居て欲しくないんだな分かるぞその気持ち。

「それにしましても悠里さんに会うんですけどその方は?」

ハヤテは慌てながら言つた

「何で皆さんそんなんに冷静なんですか」

「えつ、だつてコッキー（俺の母）だし」

ハヤテ以外の全員の声が揃つた。

「そんなんに自由な人なんですか」

「自由すぎじやない。あの人はほつとくじろくでもない事をするからな」

「家を空けてきて良かつたんですか」

「それは問題ない。家には生贊（親父）が居るからな」

俺は紅茶を飲み終わり、おかわりを貰つた。

「でも、大学はどうなつたのだ」

「辞めさせられたよ。今は白皇に通つている」

「大学!」

「なんで、驚いているんだ」

「この屋敷にいて驚かれるのは初めてだな

「悠里さんは何所の大学に行っていたんですか」

「ハーバードの医学の方に行っていたんだよ」

「凄く、頭が良いんですね」

笑顔で言つてきた。

「頭は良くねえよ。親を見てこつはなりたくないと思つて勉強しただけだ。それに、次頭が良いなどとほざいたらしづべや」

殺氣を放ちながらも静かに紅茶を飲む俺

「悠里、ハヤテは強いんだ！ 悠里何て手も足も出ないぞ」

「なんで、ハヤテじゃなくてお前が突っかかるんだよ。」

「なら、勝負するか？」

俺は悪ふざけのつもりで言つたが

「受けて立つぞ！」

ナギが宣言した。

「何でお嬢様が決めるんですか」

「種目は剣道でいいか」

「ハヤテ、この前みたいにかつこよく倒してくれよ」

「大丈夫でしようか」

唯一人、ハヤテの心配をしていたマリアさん

「なら、防具は無くて良いよな。その方が早く準備できるし」

「悠里さんは剣道はどれくらいできるんですか？」

「ほあ、相手の強さも知らずに戦うとはダメだな」

いつの間にか現れたクラウスが説明を始めた。

「悠里殿はな、高校生男子の中では一番強いでしょう。貴様など瞬殺だろう」

「それにほとんどのスポーツでは優勝を手にして日本では知る人は知る天才の高校生なのですよ」

「だから、俺は天才じゃない」

目の前に居たクラウスの首に手刀を当てる。

「ぐはあ

その場に倒れ氣絶した。

「はあ、今日は疲れたから帰らしてもいいつよ」

本当に疲れたな。

「うむ、その方が良いだろう。顔色が悪いしな
その日は、家に帰り睡眠をとった。

知力

「今日は小テストをしようと思つ
学校に来て最初の授業が小テストとは俺もついてないな、ここ
勉強ペースが分からなからな。
「どうにかなるか」

プリントが配られ表にするとやつたことがある問題ぱつかりだつ
た。
「（簡単だな、五分で終わると見た）」

書き終つた時にはたつたの三分だつた。後は終わるまでの睡眠で
もどるか。

「じゃ、後ろから集めてくれ」
目が覚めた時には丁度回収だつた。

「簡単だな」

そう咳きプリントを前の奴に渡した。全部のプリントを回収が終
わり教師が枚数の確認をしていた。

「姫条すごいな。範囲も分からぬのに満点を採るとは」
確認ではなく目で採点をしていた。モブのくせになんでスペック
が良いんだ！

「はあ」

俺はここに来てこここの教師のスペックに驚いた。その日は午前で
授業が終わつた。

「それにしても授業数は大丈夫なのか」

そう考えていたがこここの学校は過ごすのは問題ないが時間が余り
すぎると。

「と言つても教室でのんびりラノベ読んでるんだけどな」

一日日に色々な部活の勧誘を受けたがそう言つたことは部活動は
苦手だと断つておいた。

「なにしてるんだ悠里」

教室に入ってきたのは千桜だった。

「家に帰つても暇だから本を読もうとね」

手に持つてゐる本を見せた。

「まあ、放課後なら誰もいないから静かに読めるからな」

「それより、千桜は何で残つてゐるんだ」

俺の質問は普通だらう。だって、午前中で終わるのに学校に残るのは変だからな。

「生徒会の仕事で残つてゐるんだ」

「へえー生徒会か、何の役職についてゐるんだ」

「書記をやつています」

「そりなんだ、無いと思うけど大変だつたら頼つてくれよ」

「なら、頼つてもいいか」

「へつー！」

「いきなりですか！」

「生徒会室に案内するからついて来てくれ」

「あ、ああ、分かつた」

驚きつつもついて行つた。

「時計塔に生徒会室があるんだな」

それにしても高いな。

「でも、なんでいきなり頼つたんだ」

「まあ、行つたら分かるさ」

何で、教えてくれないんだ。エレベータで上る事数分生徒会室に到着。

「騒がしくないか」

中からは怒り声しか聞こえてこない。

「それが原因ですかから」

千桜は呆れながら言つた。

「なんだろう、俺の何かがここに入つたら負けの様な気がしてきた」

「入つて下さい」

そのまま、生徒会室に入ると二人の女子が一人の女子に怒られて

いた。

「何でいつもここに暴れるのよあなた達は」
ピンク髪の女は鬼のよつなものが後ろに見えるがあれば錯覚だよ
な。

「あれって、スタンンドか」

俺は驚きつつ千桜に聞いた。

「いつもの事だから気にしなくていいだり

それは怖くないか。

「あれ、千桜帰ったの。隣に居るのは？」
こつちに気づいたか。

「ああ、彼は姫条悠里この前転入してきた人だ」

「どうも」

ペーリとお辞儀をした。

「どうも。でも、ここは役員以外は立ち入り禁止よ

「悠里は生徒会の仕事を手伝ってくれるそうだ」

「それなら、書記の手伝いしてもらえる

何だろ、この人には逆らえることは出来ないよつな気がしてき

た。

「J ud .

なんでこの応答になつたんだろうな。

「悠里こつちに来てくれ」

俺はそのまま隣の部屋に連れて行かれた。

「何で、応答がJ ud .なんだよ」

笑っていた。

「俺の中の何かが勝手に反応をしたんだ」

「悠里もホライゾン読んでたんだな」

「小説は何でも読むからな」

あの小説はページ数が多いが読むと面白くて読みやすい。

「まあ、書記の仕事は余りないからほとんど小説読んででも大丈夫だ」

「仕事が無いって？」

「ああ、ほとんどヒナギクがやってくれるからな」

「万能なんだな、さつきの人」

その後は小説の話をしていただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5271z/>

意外な人の恋愛

2011年12月20日22時45分発行